翻訳

「偏見と信仰」（五旬節主日[1]）
ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿　説教

古橋 昌尚訳
清泉女学院大学

John Henry Newman, “Prejudice and Faith”[2]
(*Quinquagesima Sunday*)

Translated with an Introduction by FURUHASHI Masanao
Seisen Jogakuin College

本日の福音の箇所には、新約聖書を読む人ならば首を傾げてしまうようなことが含まれています。即ち主イエスが十字架上で苦しまねばならなかったという主の受難についての預言を、弟子たちが悟るのになんと鈍かったかということです。この事情を、即ち弟子たちが理解できずいかに鈍かったかを説明するには、預言で明かされたこととは反対の考えが弟子たちの頭を占めていたという状況を斟酌する必要があります。これを真理に対する根強い偏見と呼びます。この弟子たちの場合は誠実さから来る宗教的偏見であって、疑いもなく宗教的な動機に基づいた偏見であり、それは根強く執拗な偏見でもあるのです。主が初めて自らの運命を預言したとき、聖ペトロはこう反応しました。「主よ、そのようなことを仰言らないで下さい。そのようなことがあなたに起こるはずがありません」[3]と。ペトロがあまりに激しい口調で言ったので、聖なる福音記者はペトロが「われらの主を諌めて、叱

り始めた」[4]と記しているほどです。ペトロにしてみれば敬いと愛の心からそのようにふるまったわけですが、それでも熱気を帯びた激しい口調で言い放ったことはその表現から明らかです。ペトロの偏見がいかに根強いものであったかは容易に察しがつきます。まさにこの偏見を通して、今日のこの福音で語られる事柄が解き明かされるのです。主はこう仰せられました。「よく耳を傾けなさい。私たちはこれからエルサレムに向かいます。そこで人の子について記されていることが実現されるのです。即ち、人の子は異教徒の手に渡され、嘲られ、鞭打たれ、唾を吐きかけられるのです。異教徒が人の子を鞭打ったのち、死に陥れるでしょう。そして三日の後、人の子は復活するのです」[5]。これほど明快に語られた預言がほかにありえるでしょうか。ところが、この預言を耳にして弟子たちは一体なにを悟ったのでしょう。聖書はこのように記しています。「弟子たちにはこれらの言葉が何一つ分からなかった。弟子たちが理解できないように隠されていたからである。それ故、弟子たちには記されていたことを悟ることは出来なかった」[6]。それでは、なぜこの奥義が弟子たちから隠されていたのでしょう。弟子たちには見る目がなかったからです。

また復活の話ですが、弟子たちは墓が空になっているのを知ります。聖書にはやはり同じように、「弟子たちは人の子が死者の中から復活しなければならない、という聖書の言葉を理解しなかった」[7]と記されています。マグダラの聖マリアとそのほか数名の女性たちがこの墓での出来事を語ったとき、「弟子たちには根拠のない話に思われ、女性たちの言葉を信じなかった」[8]のです。それ故、主が弟子たちに現れたとき、「主は弟子たちの疑い深さ、その心の頑さを厳しく咎められた。弟子たちが復活の後に主を見た者たちの言葉を信じなかったからである」[9]。

弟子たちのこの頑なな態度は、注目すべき心理状態を物語っています。福音書の中でこの精神状態がいかに描かれているかを詳しく見てゆくならば、私たちの間で実際におこっていることを理解するのに役立つでしょう。それによって私たちはこの現象に対して警戒の手綱を

引き締めるようになり、更にこのように自問するのです。なんらかの点で私たちもこうした弟子たちと同じような不完全な状態にあるのだろうか。この聖なる――当時偏見に満ちてはいたものの――この聖なる弟子たち、救い主イエスの弟子たちと同じように不完全な状態に。

なぜ弟子たちには真実を見抜くことが出来なかったのかについて、ここで詳しく考察してみるのもよいかもしれません。その原因は弟子たちが旧約聖書を誤って解釈していたところにあります。弟子たちの解釈は当時としては一般的に受け入れられていたもので、律法学者やファリサイ派が実際に教えていた事柄でした。律法学者とファリサイ派といいますと、当時モーセの座に坐り、人々にモーセの教えを授ける真似ごとだけをしていたのです。当時多くの人々は、神から約束された救い主、来るべきキリストは、ちょうどソロモンのように一つの時代を画する偉大な王子であろうと考えていました。事実といえばソロモンは他の王たちよりも人間的なレベルにおいて優れていただけだというのに。即ち、人々は来るべきメシヤはこの世の宮廷、この世の富、この世の宮殿、土地、軍隊、従者、そしてこの世の王国の栄華を手中に納めるものと考えていました。これが当時人々の考えていたことです。人々はたしかに自分たちを解放してくれる者を待望してはいたのですが、その解放者はギデオンやダビデ、ユダ・マカバイらのように、剣と槍、大きな喇叭を手にして、敵に傷を負わせ、血を流し、捕虜を投獄しにやって来る者と考えていたのです。

人々はこの教えが聖書に基づくものであると勝手に信じ込んでいました。人々は第一に自分勝手な想像で都合のよい箇所を聖書からとり上げ、それに矛盾するところは全て無視したのです。例えば、預言者イザヤや他の預言者たちが我らの主、来るべき救い主について、「征服者」として語っているのは明らかです。イザヤは救い主を敵の血に赤く染まった者、諸国の指導者を怒りのうちに打ちのめす者として語り、王たちを厳しく統制し、自分の領土を地の果てにまで押し拡げる者として描き出しています。他方で、聖書のほかの箇所では、救い主メシヤが異なった様相で描き出されているのも、また確かです。即

ち、人間に拒絶された者、ハンセン氏病患者、見捨てられた者、虐げられた者として、また唾を吐きかけられ、槍で突き刺され、殺害される者として語られているのです。ところが、こうした聖書の箇所に限って人々は遠くへ退けてしまいました。こうした聖書の箇所が心に及ぼす真の意味を一切締め出してしまったのです。聖書の言葉をただ聞くだけで、自分の頭で批判的に理解することはなかったのです。従ってメシヤ像は実質的に一つの種類に集約されました。他方で、人間に拒絶されるメシヤ像は書かれなかったのと同じです。そうです、彼らにとってはそのようなメシヤ像は実際に書かれていなかったのです。こうした聖書の箇所はその本来的な意味を発揮する可能性があったにも拘らず、弟子たちにとってはついぞ本当の意味をなしえませんでした。それ故に、キリストでありながら鞭打たれ、唾をはきかけられることになると主が予め話されたとき、弟子たちは仰天してこう叫んだのでした。「主よ、とんでもないことを仰言らないで下さい。そんなことが起こるはずがありません。栄光の主であるあなたが殴られ、打ちのめされ、傷を負い、死に絶えるなどとは。そんなことがあなたの身の上に起こるわけがありません」[10]。

使徒たちの冒した過ちは、福音の示す永遠にして至福なる真理、即ち人々に拒絶された救世主に関する預言の真理を恐れ拒否したということです。その過ち、恐れや拒否は、むしろ使徒たちが神の栄誉を熱心に追い求めた信仰心から――たしかにそれは誤った狂信ではありますが――そこから生まれたものであると見てとれます。従って、仮に今日人々が同じような過ちを冒すことがあったとしても、それもまた尤もなこと。かれらには宗教的情熱という申し分のない立派な理由、充分な言い訳があるのですから。まさにその通り。今日でも当時と同じように、聖書を手にして、聖句をそらんじ、その言葉を口もとに上らせはするものの、その意味を大きくとり違えている者たちがいます。もともと聖書の真意にたいして偏見を懐いているからです。

「わたしが話すのは人々を勝ち得るためなのです」[11]。使徒パウロもこのように述べているではありませんか。更に、「わたしの語ることを

自分で判断しなさい」[12]と付け加えています。ご列席の皆さん、まさにその通りではありませんか。これほど厳しいことを述べる資格が自分にないことを重々承知しておりますが、それでも、本当のことではないでしょうか。この教育を受けた知性のある立派な人々のなかでも大勢の、いや大多数の人々が、聖書にこじつけをしてきました。自分の誤った解釈を守らんがために、真理にたいして猛烈に反対するのです。キリストの教会は今もこの地上で歩みを続けております。キリストがこの世で人間の姿を身に纏われたときに歩んだのと同じように。更に、主が当時この世で自らの使命に徹しそれを全うすることによって聖書の御言葉(みことば)を成就されたように、教会もまた自らの使命に徹し全うすることによって聖書の御言葉(みことば)を成就しているのです。またキリストは聖書の中で待望され預言されていましたが、それはイエスが生きてきた時代もやはり同じでした。それと同様に教会は今日ある形をとって聖書の中ですでに約束され、預言されていたのです。ところが、今日人々は聖書を読んで自分にはそれが分かると考えているのですが――当時のユダヤ人が聖書を読んで分かると思い込んでいたのと同じで――実は理解などしていないのです。それはなぜでしょうか。当時のユダヤ人と同様に、きちんとした教えを受けてこなかったからです。今日に至るまで人々は誤った伝統をそのまま受け継ぎ――これもまたユダヤ人が当時ファリサイ派の伝統を受け継いでいたのと同じようなもので――自分では物事がはっきり見えていると思っていても実は見えておらず、真実に対しては偏見を抱き、いざ真実が明かされると衝撃を受けて腹を立てるのです。

当時のユダヤ人たちは聖書のある特定の箇所を気にも留めずにやり過ごしました。そうした箇所によってこそかれらは自分の過ちに気づき、訂正することができたはずであるのに。それとまったく同じように、今日キリスト信者たちはある特定の条(くだり)を重要視せずにやり過ごしてしまっています。こうした聖書の箇所を、もし根気よく丁寧に説明しさえすれば、キリスト教信者たちはその過ちから解放されるであろうに。例えばユダヤ人たちはこのような聖書の条(くだり)を避けて通ってきま

した。「かれらはわたしの手とわたしの足とを突き刺した」[13]。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのか」[14]。「その人は人々から見捨てられた。多くの悲しみを負い、嘆きに通じていた」[15]。こうした条(くだり)こそキリストについて語っているというのに。他方で、今日人々は教会について述べている条(くだり)に気にも留めず、安易にやり過ごしてしまっています。例えば、「だれの罪でも、あなたが赦せば、その罪は赦される」[16]。「あなたはペトロ。この岩の上に教会を建てよう」[17]。「主のみ名において、かれらに油を塗る」[18]。「真理の柱であり礎なる教会」[19]、その他いろいろあります。人々は「唯一にして聖なる普遍的(カトリック)教会」という教義が正しいはずはないと頭から決めつけているので、はなからこうした条(くだり)に心を砕こうともせず、ただやり過ごしてしまうのです。かれらにはこうした聖句が何を意味するのか説明もできません。それでいて、こうした聖句がカトリック教徒の人たちの主張するような意味ではありえないという変な確信だけは人一倍強いときています。それも単にカトリシズムは真理を伝えていないという理由で。実際のところ、かれらの頭の中にこそ偏見が深く根を下ろしているのであって、聖書もこれを盲目の状態と呼んでいます。かれらにはこうした聖書の条(くだり)をはじめ他の多くの箇所についても、やはり一体どんな意味であるのかを説明することができません。かれらにはどうでもよいことなのです。つまるところ、こうした箇所は重要でないというのです。論点を避けているとしか言いようがありません。いざ聖句の意味を説明するよう迫られると、真先に頭にのぼって来たことを口にのせて、質問者を満足させるか、または狼狽(どぎまぎ)させるかするだけです。厄介な――必ずしも取るに足りないという意味ではありませんが――厄介と思う問題をもっぱら取り除こうと一所懸命なのです。

さて、これはまったくおかしなことではないのでしょうか。このようにふるまう者たちは実際、聖書の中に記されている事柄を端折り、自分の偏見に頼り、聖書の偏った教えに基づいて生活しておりながら、他方で自分ではいつも聖書に基づき、聖書の価値に頼って生きていると豪語しながら極めて個人的な自己の判断基準を利用しているの

です。それどころか、かれらは判断を下すことさえしない。精査することもしなければ、聖書の価値観に基づいて生きているわけでもない。都合にあいさえすれば聖書からどんな箇所でも手あたり次第とりあげて、残りは手をつけずに放っておく。そのやり方は自分の個人的な判断というよりも、むしろ個人的な偏見、更には個人的な好みに基づいていると言うべきです。

ここで一つだけつけ足しておきたいことがあります。このようにふるまう者たちの間でも、それぞれ動機づけはまったく異なるものだということです。主が地上に来られたとき、その主に躓いた者たちがいましたが、かれらが互いに異なった人間であったのと同じです。心の頑ななファリサイ派と心の素直な使徒たちとの双方が、共にキリストのご受難とその死に驚愕し、衝撃を受けたのです。同様にして今日、聖なる教会に躓く人々が二つの種類に分けられます。一方は希望を失い、他方は希望に満ちています。「キリストの出来事」がそれを物語っているとおりです。どちらが希望を失い、どちらが希望に溢れているのか、それを言い当てる術(すべ)はありません。辛うじてあるとしたら、唯一この「キリストの出来事」に頼るしかありません。そうなのです。即ち、ある者たちは教会から遠ざけられるばかりで、教会について見聞きすればするほど尚更その希望を失ってゆくようです。他方、別のグループの人々は、時を経るに従ってますます教会に近づけられ、ついには自らを教会に奉献するに至るのです。

以上のような状況に鑑みたとき、私どもカトリック信者はこの偏った見方に翻弄されている人々にどのように向きあえばよいのでしょう。主にして師なるキリストに倣う以外に最上の方策はありません。主は極めて辛抱強い態度でこうした人々に接しました。それどころか主は絶えざる苦しみにあえて身を投じたのです。「その人は傷んだ葦を折らず、くすぶる灯芯を消さない」[20]。主は言い争うこともなく、ただ無言で人々を導いたのです。主は驚くべきみ業を示し、言葉と慈しみによって人々を少しずつ動かしてゆきました。人々の目を啓かせ、ついにはすべてを信ずるまでに至らしめたのです。あの大使徒、主の復

活を最も頑なに疑ったあの使徒でさえ、その懐疑を乗り越え、ついには「我が主、我が神」[21]と叫ぶに至りました。キリストが人々に対応されたのと同じように、今日私たちもふるまうべきなのです。教会も現にそのようにふるまっているのですから。議論は自らに相応しい持ち場においてこそ真価を発揮するものであって、それ自体では最も意義のある事柄ではありません。最も意義のある任務とは人々を納得させ、その心をとかし、その意志を動かして、行動に駆り立てることです。これこそ教会の行うべきことであり、使命であります。教会の主たるイエスの模範に従って、教会は人間の絆、愛の絆、また神の愛をもって人々を手繰り寄せるのです。まさに教会は「すべてを希望し、すべてを耐え忍ぶ」[22]のです。教会はその神殿の門扉を開き、教会はその祭壇に火を灯します。教会は秘蹟というヴェイルのもとに至聖なる御方を献示し、教会は声高らかに歌いあげます。そして、片意地な魂もついには穏やかになだめられ征圧されて、古老シメオンと声を合わせてこう叫ぶのです。「もうこれで満足です。さあ逝かせて下さい。あなたのみ顔を拝んだ今となっては。主よ、今あなたの僕を安らかに旅立たせて下さい（*Nunc dimittis*）。我が目があなたの救いの業を見たのですから[23]。これまであなたのことについて、この耳で伺っておりました。ところが今、この目であなたを直に拝んでいるのです」[24]。ご復活の後、主は自ら弟子たちの目を啓き、聖書を理解させました。そのお蔭で今日人々の心は柔軟になり、照らしを受けています。それによって人々は今日、教会が自らについて語られた預言を余すところなく成就するのを目のあたりにしています。『律法の書』、『預言の書』と『詩篇』に記されたことをすべて、教会が実現している様子を。その挙げ句、人々は膝をかがめて伏し拝み、神はまことにここにおられると告白するのです[25]。

幸いなるかな、膝をかがめて神を伏し拝む者。幸いなるかな、神の恵みによって導かれ、真理を心に懐く者。幸いなるかな、聖霊の穏やかな導きに感応し、心素直に従う者。こうした者たちは神が永久の安息に至らしめるまで、その歩みを止めることはない。ところで、ご列

席の皆さん、これまで述べて参りましたことは、ある特定の限られた人々にだけ当てはまるというのではありません。むしろ、私たちのすべて、一人ひとりに言えることなのです。といいますのも、私たちの誰もが、「特定の限られた人々」ではなく、私たちの一人ひとりが、カトリックであろうとなかろうと、誰もが驚くべき方法で神に導かれているからです。それは驚嘆に満ちた方法であり、私たちには想像もつかないような方法なのです。私たちの生まれつきの感情や好みとは馴染みのない、素晴らしく驚くべきやり方で、神は我々一人ひとりを導かれるのです。自分が教会の中でどんな立場にいるかなどとはまったく関係ありません。信仰は神が賜った根本的な恵みであり、同様に信仰の試しもまた神が私たちに用意した必要不可欠な試練の場なのです。十全な信仰を身につけるには、どうしても信仰そのものが現実的な場で試されなければなりません。

この真理は説教の発端となった聖書の箇所、即ち「イエスの受難の予告」の箇所を見ればわかります。主が自らの死と受難について預言をすると、弟子たちは縮み上がります。そのとき主が一体何をされたかを思い出してみて下さい。また、主が目の不自由な人に出会うことがありました。そのとき主は目の不自由な人を受入れ、目が見えるようにしてやりました。主はなぜ目の不自由な人にこうした特別な恵みを施したのでしょう。主ははっきりとこのように述べておられます。「あなたの信仰があなたを救ったのです」[26]と。ここでは、友でもある弟子たちがなかなか信じようとしない様子に業を煮やし、主が暗黙のうちに諌めている姿が見てとれます。主は次のように諭しているかのようです。信じる者に出来ないことは何もない。わが民よ、社会から見捨てられたこの目の不自由な人こそ、あなた方によってよい教訓となるのです。よく耳を傾けて聴きなさい。この人はあなた方を恥じ入らせるのです。この人は私を信じ、疑ったことなどありませんでした。ところが、あなた方は私の言葉に躓き、何か言うと、「主よ、そんなこと、起こるはずがありません。」[27]などと口応えするのです。

今日の聖務日課の朗読箇所は、この貴重な教訓を示すもう一つの例

を提供してくれます。教会ではこの日、アブラハムの召し出しの物語[28]が朗読されます。アブラハムが神の御言葉（みことば）にまっすぐに従い、刀をかざして自分の息子を生贄にしようとする場面で[29]、その気高い行いを黙想するよう招いているのです。太祖アブラハムは私たちの信仰の模範となるべきものです。その信仰は試練に揉まれなければなりませんでした。はじめに祖国を離れ、親族に別れを告げて旅立つよう招かれました。次に、最愛の息子イサクを生贄の捧げものとするよう告げられたのです。最初の試練はたしかにそれ自体厳しいものであったはずです。それに対して第二の試練は、仮にアブラハムほどの信仰がなかったならば、当人にとってはどれほど大きな躓きとなっていたことでしょう。主イエスが人々に拒絶され殺されることになると聞いて、弟子たちは大きな衝撃をうけました。そうしてみるならば、実の息子イサクが自分の手にかかって殺傷されなければならないほどの咎がアブラハムにあったとしても尤もなことでしょう。例え、実の父親の手で愛する子をあやめなければならぬほどの咎があったとしても。それでもアブラハムは厳かに、速やかに、そして落ちついて神から受けた指令を実行しようとしたのです。まるでほんの日常の何気ないことを行うかのように。この行動をもってアブラハムは自分の信仰を明らかにし、神からの祝福に与ったのです。

皆さん、これはまた私たちが歩むべき道でなくてはなりません。このことを是非忘れないで下さい。神はただ自動的に信仰を授けるなどということはなさいません。むしろ、信仰を試されるのです。信仰なくして神のみ国に入ることなど誰にもできません。従って、神に仕えたいと望む者、自らの魂を救おうと願う者はみな、まずは心してとり組まねばなりません。こうした奉仕への望みや救霊への願いを遂げるためには、惜しみない信仰、自己を惜しむことのない奉献がどうしても必要となってくるのです。神のみ手にすべてを委ね、神と打算的な駆け引きをしてはなりません。神に条件を提示することもなく、ただひたすらこう告白するのです。

「主よ、私はここに控えております。あなたの望まれる通りに、私は

何にでもなりましょう。あなたの派遣されるところなら何処へでも赴きましょう。あなたの課されるものならば、何でも耐え忍びましょう。それも自らの力で、または自らの度量で行おうというわけではありません。私に何か強いところがあるとしたら、それは正に弱さの中にあります。仮に何らかの形で己に頼るならば、必ずしくじることになるのです。実際のところ、主よ、私はあなたに寄り頼んでいます。信頼しておりますので、あなたがきっと助けて下さると悟っております。求められることは何でもなし遂げることが出来るよう、あなたはとり計らって下さるのです。あなたに寄り頼んでおりますので、あなたが私をおき去りにしたり、見捨てたりすることはないと信じております。切り抜けることの出来ない試練を私に負わせることなど、あなたは決してなさいません。あなたの側に落ち度があることなどありえません。また、主のお恵みが無くなるなどということもありません。私に足りないものはなく、すべてに満ち溢れています。それでも、試みを受けることはありましょう。第一に、私の理性が試されるのです。それも信じる術(すべ)を学ぶためです。次に私の情愛も試みを受けなければなりません。己を喜ばせるのではなく、あなたにつき従ってゆく術(すべ)を学ぶためです。この肉体も試みにあうでしょう。それも肉体を意志に従わせるためです。あなたは何よりも大切なお方。いかなるものを一緒に合わせてみたところで、それもあなたの貴さには及びません。仮に、私から何かをとり去ることがあったとしても、あなたはすべてを償って下さいます。実際にあなたはすべてを償われるのです。ご自身をもこの私に与えて下さるほどですから。主よ、私をつねに導いて下さい。」

【解説】

1. ニューマンの生涯

ジョン・ヘンリー・ニューマン John Henry Newman は 19 世紀イギリスの宗教家で、1830 年代から 1840 年代にかけて当時のイングランド

国教会を刷新しようとするオックスフォード運動を主導した。1801 年 2 月 21 日ロンドンで生まれ、1817 年にオックスフォード大学のトリニティ・コレッジに入学する。1822 年にオックスフォード大学オリエル・コレッジのフェローに選ばれ、1825 年イングランド国教会の司祭となり、1828 年聖マリア教会の主任となる。

1833 年 7 月にジョン・キーブルが聖マリア教会でおこなった説教「国民の背教」が発端となって、ニューマンはハレル・フルードらとともに『時局冊子』*Tracts for the Times* を発行し始め、そこからオックスフォード運動へと発展してゆく。ニューマンにとってこの運動は、イングランド国教会を救うために、キリスト教の根源的なアイデンティティへの回帰を目指し、教会を使徒継承の原理によって活性化しようとするものであった。運動の活動はこの『時局冊子』を中心に展開した。聖マリア教会でのニューマンの説教は、オックスフォード運動の活動のさなかにも評判となり、多くの学生や教授らを引きつけ、教区外からも聞きに来た。

1841 年 2 月に発行した *Tracts* 第 90 号でニューマンはイングランド国教会がその教義の基をおく信仰の「三十九箇条」が古代より継続しているローマ・カトリック的な解釈を可能とするものであると示そうとした。それに対してイングランド国教会の主教たちや伝統的国教会の人々から激しい反発を受け、『時局冊子』の発行も中止に追い込まれ、その後オックスフォード運動も勢いを失ってゆく。

1842 年に聖マリア教会の主任司祭を退き、オックスフォードに隣接する村リトルモアに移り、修道的共同生活をはじめる。その間に『キリスト教教理発展論』*An Essay of the Development of Christian Doctrine* を執筆するが、これを通してニューマンはカトリック教会へ移る意志を固めていく。1845 年ニューマンは、オリエル・コレッジのフェローを辞し、カトリック教会に移る。1846 年にオラトリオ会に入会し、1847 年に司祭に叙階される。1848 年英国ではじめてオラトリオ会をバーミンガムに創設する。

1851 年にアイルランドで初めてのカトリック大学を創設するために

総長となることを委任され、1852 年には大学の理念についての五つの連続講演 *The Discourses on the Scope and Nature of University Education* を行う。中断を経て更に五つの講演が執筆され、それらが一冊として同じ年に出版される。その後大学での講義と評論が加えられ最終的に編纂されて『大学の理念』*The Idea of a University* として 1873 年に発行される。1854 年から四年間アイルランドのダブリンで創設されたカトリック大学の総長を務める。

チャールズ・キングズリーからの非難とその論争を経て、ニューマンは 1864 年『生涯の弁明』*Apologia pro Vita Sua* を著し好意的に迎えられる。1878 年オックスフォード大学のトリニティ・コレッジ名誉フェローとなる。1879 年に枢機卿に任ぜられる。枢機卿として掲げるモットーを「心が心に語りかける」*Cor ad cor loquitur* とする。1890 年 8 月 11 日、バーミンガムにて死去する。墓碑銘にはニューマン自らがその生涯そのものを表すフレーズ、「暗闇と幻影から、真理へ」*ex umbris et imaginibus in veritatem.*を刻んだ。それから百年の時を経て、カトリック教会は 1991 年にニューマンを尊者に、2010 年に福者とし、2019 年に列聖する。

ニューマンは上記の作品以外にも『四世紀のアリウス派』（1832 年）、『教義に関して信徒に聞く』（1859 年）、『承認の原理』（1870 年）など多くの著作を残す。そのほかニューマンは多くの詩と二編の小説を残し、「雲の柱」は讃美歌として親しまれ、「ゲロンシウスの夢」はエドワード・エルガーによって合唱曲として作曲され上演される。またニューマンは説教家として成功をおさめ、『教区説教集』八巻（1834 年～1843 年）、『大学説教集』（1843 年）などにおいて多くの説教を残している。

ニューマンには大学エリートで隠遁者、学者で宗教家といったイメージがつきまとうが、その人生をたどるならば、考え方の違い、教条的な論争などにおいて大きな衝突を繰り返し、少なからず失敗や挫折を経てきている。大学の卒業試験では望む成績を残せず、その失敗は長きにわたって失望感を生んだ。『時局冊子』の最終号では主教らから

激しい非難や反発を受け、1841 年の末からは「死の床にあった」と述懐している。ダブリンで創設されるカトリック大学の総長に就任するが、その運営や教育論、学びの方法において周りの人々を説得することも、折り合いをつけることもできずに、四年後に辞任する。

実際にニューマンは生涯において大きな軋轢や論議、論争を呼び起こしてきた。それでもニューマンは人生の折々において自らの信、思想や信仰、教説や解釈を信じて貫こうとした。聖マリア教会とオックスフォード大学を去り、カトリック教会に移る際には、今まで育んできた親しい友人や共同体、支えてくれる組織など一切を喪うという損失を代償にして、自らの信念、献身する真理に基づいて人生を歩みつづける道を選んでいる。それらはニューマンが直面する時どきの時局に誠実に向き合ってきたところから生まれる軋轢、衝突、葛藤でもあった。ニューマンは修道的な、ときに隠遁的な生活を営み、その世界や社会から離れていたとしても、つねに教会や社会に向かいそれらが直面した時局にあわせて真摯にとり組んだ。その著作のほとんどが occasional なものであったところからもそれが言えよう。

ニューマン研究において、その生涯を時どきの時代の流れ、宗教的社会的歴史的文脈において読み解いていくことは肝要で必須でもある。その時どきにおいて社会や教会、大学や思潮における軋轢と葛藤にあって、ある時には政治的に読み解いていくことも必要となろう。それにもまして、現代の研究では今日におけるニューマンの同時代的な意義がハイライトされることで、その価値が改めて評価されている。日本でも近年ニューマンが現代に語りかけるメッセージに焦点があてられ、その生涯、著作の翻訳、教育、神学などの研究が推し進められている。その人物としての評価、教会指導者、宗教家、神学者、思想家、説教家としての評価は歴史が下していくことになる。

2. 説教とその訳出について

ここに訳出した説教「偏見と信仰」は、1848 年の 3 月 5 日、今から 175 年前に聖チャド教会でおこなわれたものである。ニューマンが

1845 年 10 月にカトリック教会に転会し、1847 年 5 月に司祭に叙階し、1848 年 2 月にバーミンガムに英国初のオラトリオ会を設立したばかりのことであった。ニューマンの説教もこうした文脈、ニューマンが直面していた状況に照らして読んでいく必要があろう。

この二年後にバーミンガムの司教座となる聖チャド教会は、1839 年から 1841 年にかけて、当時バーミンガムで急速に拡大するカトリック教徒のために建てられている。宗教改革以来英国で初めて再建された最初のカトリックの司教座（カテドラル）で、これが正式に司教座となるのは、教皇ピオ九世がイングランドとウェールズにおけるカトリック教会司教区の再興を実施した 1850 年のことであった。

説教は当時のイギリス社会では重要な役割と価値とを担っていた。ニューマンにおいても説教家として果たした仕事と役割は計り知れず、実際オックスフォード運動が進展したのは、ニューマンの説教に負うところが大きかった。ニューマンの思想や信仰、神学や霊性について研究する際に、その著作、神学、哲学、教育に関する書物や自叙伝からだけでなく、説教からもそれらを読み解いていくことができよう。

ニューマンは聖書を引用する際に、カトリック教会に移ってからも依然として King James Version を使用するなど複数の版を用いているが、説教では字句にこだわらず聖書箇所を自由に採り入れたり、まとめた形で提示したりしている箇所もある。また、そのあらゆる典拠からもニューマンがいかに聖書に広範に通じていたかが自ずと明らかになってくる。この説教でもニューマンがテーマにそって聖書を根拠として話を展開していくさま、四つの福音書は言うまでもなく、パウロの手紙、旧約の預言書、創世記、詩編、ヨブ記など、一つに偏ることなく、広く聖書を用いている様子がうかがえる。

この翻訳では、ニューマンの聖書引用箇所に際して新共同訳にあたったが、ニューマンの説教の文脈を尊重して、またその自由闊達な聖書利用による流れと勢いを壊さないためにも、あえて英語オリジナル・テキストをそのまま訳して載せることとした。それでも、あえて

訳者註を設けてニューマンが言及している聖書の箇所の出典を記し、更に新共同訳の箇所をあわせて記すこととした。それは第一にニューマンの聖書引用の出典に言及するためであり、第二に新共同訳を参考にしながら実際にこの説教翻訳に取り入れている箇所もあるからであり、第三にそれによって引用した聖書箇所の文脈にも触れやすくするためである。今後ニューマンがいかに聖書の節をどの版をもとに自らの説教に採り入れて使用したかについての研究のために、何らかの資料となるかと考える。

また、新約聖書が旧約聖書の再解釈であるという意味で、新約聖書の記者のことばのなかに実は旧約の箇所が多分に含まれていたり、言及していたりするという仕組みにおいて、ニューマンが引用したり言及したりする聖書の箇所についてふれて出所を明らかにするという作業はきりがなくなる。その具体例は、註 23 番, 24 番, 25 番に見られる。註の 23 番, 24 番が呼応する箇所で、ニューマンは「ルカによる福音書」2 章のシメオンによる預言に言及するが、その引用部分の後半はヨブ記 42 章の一節から引いて、それをあえてひとつづきに「 」で括っている。そこで、聖書箇所の出典を記す際には、ニューマンが直接的に引用する箇所に限ることとした。

註

[1]「説教用として、読み上げではなく。聖チャド教会にて── 3 月 5 日、1848 年」（手書き原稿に記された書き込み）

訳者註

[2] John Henry Newman, “Prejudice and Faith,” *The Catholic Sermons of Cardinal Newman*, edited at the Birmingham Oratory (Burns & Oates, London, 1957) 55-66. より訳出した。

[3] マタイによる福音書 16: 22「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」（新共同訳）。以下、訳者註においては、参考のために新共同訳による相当箇所を載せる。

[4] マタイによる福音書 16: 22「ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめは

じめた。」

[5] ルカによる福音書 18: 31-33「イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」

[6] ルカによる福音書 18: 34「十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。」

[7] ヨハネによる福音書 20: 9「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」

[8] マルコによる福音書 16: 11「しかし彼らは、イエスが生きておられること、そしてマリアがそのイエスを見たことを聞いても、信じなかった。」

[9] マルコによる福音書 16: 14「その後、十一人が食事をしているとき、イエスが現れ、その不信仰とかたくなな心をおとがめになった。復活されたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。」

[10] マタイによる福音書 16: 22「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」」。マルコによる福音書 8: 32「しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。」

[11] コリントの信徒への手紙一 9: 16-19「もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。自分からそうしているなら、報酬を得るでしょう。しかし、強いられてするなら、それは、ゆだねられている務めなのです。では、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるときにそれを無報酬で伝え、福音を伝えるわたしが当然持っている権利を用いないということです。わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。」コリントの信徒への手紙一 9: 22-23「弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」

[12] コリントの信徒への手紙一 10: 14-15「わたしの愛する人たち、こういうわけですから、偶像礼拝を避けなさい。わたしはあなたがたを分別ある者と考え

て話します。わたしの言うことを自分で判断しなさい。」

[13] ヨハネの黙示録 1: 7「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る、ことに、彼を突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。」 Cf. ヨハネによる福音書 19: 37「また、聖書の別の所に、「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」とも書いてある。」

[14] 詩編 22: 2「わたしの神よ、わたしの神よ　なぜわたしをお見捨てになるのか。」

[15] イザヤ書 53: 2-3「見るべき面影はなく　輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ　多くの痛みを負い、病を知っている。」

[16] ヨハネによる福音書 20: 23 「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

[17] マタイによる福音書 16: 18「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」

[18] ヤコブの手紙 5: 14「あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。」

[19] テモテへの手紙一 3: 15「神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。」

[20] イザヤ書 42: 3「傷ついた葦を折ることなく　暗くなってゆく灯心を消すことなく　裁きを導き出して、確かなものとする。」

[21] ヨハネによる福音書 20: 28「トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。」

[22] コリントの信徒への手紙一 13: 4-7「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

[23] ルカによる福音書 2: 29-30「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり　この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」

[24] ヨブ記 42: 5「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。」この箇所はニューマンが二つの聖書の箇所を一つの引用符“　”で括っている。即ち、二つの聖書の箇所を、内容が類似しているという点において、ひと括りにしている。別言するならば、ルカ福音記者がヨブ記の箇所を意識して編纂していることを前提に、内容をまとめるようにして、標記しているということになろう。

[25] コリントの信徒への手紙一 14: 25「心の内に隠していたことが明るみに出され、結局、ひれ伏して神を礼拝し、「まことに、神はあなたがたの内におられ

ます」と皆の前で言い表すことになるでしょう。」ニューマンはこの箇所に引用符“　”を施しているわけではないので、その言及に値する聖書の箇所を指し示す必要はないと思われるものの、どのような文脈でニューマンがこの説教を展開しているかをたどるうえでは、何らかのヒントとなる。以下、註の 28 番、29 番の言及する箇所（創世記）においても同じことが言える。

[26] ルカによる福音書 18: 42「そこで、イエスは言われた。「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。」」

[27] マタイによる福音書 16: 22「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」」

[28] 創世記 12 章以降参照。

[29] 創世記 22 章。